

## このセリフをどう言うか

大学宗教センター長 栗原 健

<sup>28</sup> 人々は、イエスをカイアファのところから総督官邸に連れて行った。明け方であった。しかし、彼らは自分では官邸に入らなかった。汚れないで過越の食事をするためである。<sup>29</sup> そこで、ピラトが彼らのところへ出て来て、「どういう罪でこの男を訴えるのか」と言った。<sup>30</sup> 彼らは答えて、「この男が悪いことをしていなかったら、あなたに引き渡しはしなかったでしょう」と言った。<sup>31</sup> ピラトが、「あなたたちが引き取って、自分たちの律法に従って裁け」と言うと、ユダヤ人たちは、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」と言った。<sup>32</sup> それは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、イエスの言われた言葉が実現するためであった。<sup>33</sup> そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。<sup>34</sup> イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」<sup>35</sup> ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。」<sup>36</sup> イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」<sup>37</sup> そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」<sup>38</sup> ピラトは言った。「真理とは何か。」

ヨハネによる福音書 18 章 28 節-38 節 a

今日の聖書箇所はイエス受難のドラマの 1 コマですので、教会では受難節に読まれることが多いです。しかし、この箇所は、私たちが常に心に留めておくべき大切なことを示したテキストですから、1 年に 1 度というのはいけません。今日はこの文章から学びましょう。ここでカギとなるのは最後のセリフ、「真理とは何か」という言葉ですので、こちらにご注目下さい。

この箇所は、エルサレムで逮捕されたイエスがユダヤの最高法院によって死刑の判決を受け、ローマ総督のところへ引立てられて来るという場面です。当時、パレスチナの地はローマ帝国によって植民地とされ、都エルサレムには、ローマから派遣された総督が行政のトップとして据えられていました。この総督が、ユダヤの人々がローマの支配に反抗することがないように、睨みをきかせていたのです。ローマに対するレジスタンスはパレスチナ各地で散発的に続いていたので、これを抑えておく総督の任

務は重要でした。

その総督のところに、最高法院の人々がイエスを連行して来て、「こいつはローマに齒向かう反逆者ですから、十字架につける許可を下さい」と願ったのです。もちろんイエスはローマに対して反乱を企てたことは無いのですが、政治犯ということにしないと総督は関心を持たないので、彼らは無理やりそうした罪状をでっち上げたのでした。

この時の総督は、ピラトという人物です。1世紀のユダヤ側の記録によりますと、ピラトは、わざわざユダヤ人の宗教感情を逆なでするような嫌がらせを繰り返した、陰険で残酷な支配者であったとされています。このピラトの前に、イエスは立たされたのです。

ピラトは、最高法院の代表たちから「イエスは謀反人、政治犯だ」と聞かされていたので、「お前が『ユダヤ人の王』と名乗った者か。一体何をやらかしたのか」とイエスを尋問するのですが、当然ながら話がかみ合いません。イエスが、「わたしは真理について証しをするためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」と言うと、ピラトは「真理とは何か」と尋ねます。

ここで問題です。もしも皆さんが役者だとしたら、この「真理とは何か」というセリフをどのように言うでしょうか。

これは難しい問題ですね。ピラトは一体、どのような思いと共にこの言葉を言ったのか。これをいかに解釈するかにかかっているからです。ここでは2つの可能性が考えられます。

1つは、ピラトがこの問いを真摯な思いから述べたということです。「真理だと。真理とは何のことなのか」。イエスの言葉を、自分への真剣な問いかけとして受け止める。そのような反応です。

ピラトの問いをそのように解釈したのが、2004年に公開されたメル・ギブソン監督の映画「パッション」です。これはイエスの受難のドラマを描いた激しい映画ですが、ここではピラトは、イエスの言葉を聞いて激しく動揺します。「私にとって真理とは、自分の地位を守り、政治的に生き延びることだけだ。それだけではいけないのか。」彼はにわかに自分の生き方に疑問を抱くようになり、悩みます。私たちも1人ひとり、そのように自らを問い直すことを求められていると言えるでしょう。

もう1つの可能性は、ピラトはイエスをからかってこの言葉を言ったということです。

「真理だとォ？ なんだよ、真理ってのは」という言い方ですね。「お前、そんなぶざまな格好で殺されそうになってるのに、何をでかいことを言ってるんだ」という嘲笑の言葉です。

この見方を取るのは、作家の遠藤周作です。彼はこのピラトの問いの中に、「ローマ人らしい皮肉と懷疑」を読み取り、薄笑いを浮かべながら言った、と想像しています(遠藤周作『イエスの生涯』新潮社 192頁)。

この2つの可能性のうち、どちらが本当でしょうか。歴史的に考えれば、2つ目の可能性のほうが高いでしょう。ユダヤ人に対して冷淡であったピラトが、初対面のイエス

の言葉を真面目に受け止めたとは考えにくいからです。けれども、ここで福音書の著者があえてその辺りをハッキリさせずに、突然この発言を以て福音書の文章を切ったのは、意図があつたことだった筈です。

この話を読む 1 人ひとりに対して、この箇所は、「あなたにとって真理、生きて行く上で最も大切なこととは何なのか。あなたは何を土台として生きるのか。この問いを、どのような態度であなたは言うのか」と問いかけて来ます。

心の中をよく覗いてみると、私たちの中には、実は先ほど見た思いの両方があるかも知れません。

一方では、「何が、生きて行く中で本当に大切なことなのか」と真剣に求めようとする思い。もう一方では、「そんなことを考えても、現実はそうはいかないさ。ただの言葉に過ぎない」と思うシニカルな気持ち。その両方が、私たちの心の中に同時に存在しているのではないのでしょうか。実に、このセリフをどのように言うかは、私たちの人生にとって大きな問いかけになります。

さて。このピラトの問いに答えはあるのでしょうか。ピラトが何を考えていたにせよ、この後、非常に奇妙なことが起こります。

今日の聖書箇所のすぐ後、第 19 章のほうをご覧ください。5 節になると、ピラトはイエスを鞭打ち、紫の衣を着させて茨の冠をつけさせると、民衆の前に引き出します。イエスを人々に見せながら、ピラトは「見よ、この男だ」と言います。もちろんユダヤの王の姿を揶揄した演出で、彼らしい意地の悪さが現れています。

ここが不思議なことなのですが、ピラトの真意はともかくとして、この文章を見る限り、彼はあたかも先ほど自分が述べた問いの答えを、自分で出したかのように見えます。「真理とは何か」という問いの後に、「見よ、この男だ」と言ってイエスを指さすことにより、ピラトは、「真理とは、この姿なのだ」と人々に示したように見えるからです。

ピラトが示したその姿とは、どのようなものでしょうか。

それは、人間を愛するあまり、神ご自身である御子イエスがこの地上に来られ、人間と共に歩み、人間を愛し抜くために鞭うたれ、傷だらけになって十字架に赴こうとされている、その姿です。これほどまでに神は人を愛されている。愛のためにとことん人間と共に歩もうとされている。そのために人間の全て、罪、重荷、悲しみを引き受け、背負おうとされている。その姿です。

この姿こそが世に示された真理、決して無くならない真実、本当の救いなのだと言ふ福音記者は示しているのです。ピラトは期せずして大変な役を果たしてしまったことになり

ます。

このイエスの姿が真理、つまり人間という存在の土台であるとする、私たちはどのようにこれを受け止めるべきでしょうか。

それは、このイエスの姿を胸に、私たち 1 人ひとりがどのように生きて行くかにかかっています。聖書は、イエスを通じて私たちを神に出会わせ、何が人生において本質であるか、大切であるかを教えた後に、それぞれの生きる歩みへと送り出します。「見よ、

この男だ」という言葉と共に示されたイエスの姿、神の愛が、本当に私たちの土台であり、私たちを導くものであることを、私たちは波風の多い人生を生きて行く中で見出し、味わって行くのです。

あと 1 か月余りでクリスマスとなります。喜びをもって備えるべき季節ですが、現在の世界は暗い状態にあります。新型コロナウイルス禍が一段落したと思えば、世界はウクライナやパレスチナにおける紛争、さまざまな対立によって引き裂かれています。学生たちも、将来について多くの不安を抱えております。私たちもまた、多くの困難にあって気落ちすることが多々あります。

その中にあっても、今この時、私たちに明かされている真理とは、ただ傷だらけの姿をさらして私たちの前に立っていて下さる主イエス・キリストであること、そしてその姿こそが、本当の意味で私たちを支え導くものであることです。この姿を胸におぼえ、感謝をもって毎日を歩んで行きましょう。

(2023 年 11 月 22 日)